# 古河歴史見聞録

## ～有形・無形の文化的遺産～
## 永井路子の遺したもの

とうとう「追悼」の二文字を記す日が来てしまいました。ここ数年、そう遠くない将来にこの日を迎えなければならないことを覚悟はしていましたが……。

先生はきっとお笑いになるでしょう。「何をメソメソしているの！」と。だから笑って、先生との思い出をたどることで、追悼に代えさせていただきますね。

### 寄贈された膨大な資料

初めての先生との接点は、文学館開館に向けて届いていた資料を目にした時でした。数の膨大さもさることながら、自筆原稿や文学賞の記念品など、思いが込もっているであろう貴重な品々を、何のためらいもなく、こうも簡単に他人に託せるのか……。瞠目結舌したことを覚えています。

▲在りし日の永井路子先生
平成21年10月28日
文学館テーマ展記念講演会

先生はご自身のことは決して吹聴なさらず、むしろ他の作家の方々のご協力が得られたことを我がことのように喜ばれました。そして一介の職員に過ぎない私たちを直接労ってくださいました。その優しい笑顔は忘れられません。

### 人と人、歴史・文化をつなぐ

文学館の開館以前からも、古河に対して多大なるご厚情を賜っていたそうですね。

昭和47年、市史編さん事業に参与として参画され、多くの歴史学者との橋渡し役となってくださったことに加え、ご自身も市関連の刊行物に積極的にご寄稿くださったとのこと。

多くの文化人を招来することができたのも先生のお蔭です。古河第三中学校の校歌作詞を直木賞作家で詩人の伊藤桂一氏にお願いしたのも、文化講演会の講師として司馬遼太郎氏を仲介してくださったのも先生だそうですね。

この間、郷土史研究会や文化協会、古河第二高等学校同窓会などを通じて、他市町村との文化交流にも関わってくださり『鷹見泉石日記』や『わがまち古河』などを刊行する際には、出版社との仲介の労をお取りくださいました。

そういえば、古河市の講演会はすべて無報酬でお引き受けくださいました。「古河の講演会はすべてノーギャラ。用意しちゃダメよ」と、お笑いになりながら念を押されたことを思い出します。

その他にも、歴史博物館、文学館の開館時を含め、折々に寄付金をいただくなど、先生からの物心両面にわたるご支援は、到底、この紙幅で言い尽くすことはできません。まさに先生なくしては、古河の「歴史文化のまちづくり」は為し得なかったと思います。

▲ご著書、自筆原稿、賞牌類等の文学関係資料はもちろん、お誕生以来のほとんど全ての所蔵品をご寄贈くださいました

### 永井路子の遺した思い

30数年前のご講演で、先生は次のようにおっしゃいました。

「金儲けを考える人が多い中、古河は博物館というあまり金儲けにならないものを造ることを決めた。これは英断です。500年後、千年後の人は『あの時、古河市民は金儲けを我慢して資料を保存することを選んだのだ』と感謝するはずです。皆さんは千年の値打ちのあることを選んだのです」

先生の警咳に接することができたのは生涯最大の財産です。古河を愛してくださった先生の思いを承継し「歴史・文化のまち古河」のより一層の発展のため、微力ながら尽力してまいります。

永井路子先生、本当にありがとうございました。どうか、どうか安らかにお眠りください。合掌。

古河文学館学芸員　秋澤正之



# 図書館の本棚から

【一般書/小説】
イコトラベリング1948－
角野栄子　著

戦後激動の日本。中2のイコは英語の授業で、現在進行形に夢中になる。そして、いつか「どこかへひとりで行きたい」と強く願うようになるが、手段も理由も見つからない。しかしある日、大きなチャンスが…。自叙伝的物語。

出版社…KADOKAWA

【一般書/随筆】
ひとり遊びぞ我はまされる
川本三郎　著

映画を見ること、本を読むこと、音楽を聴くこと、町を歩くこと、ローカル線の旅に出ること…。ひとり迎えた老年の日々をつづった日記。

出版社…平凡社

【児童書】
考えたことなかった
魚住直子　著

ある日、ネコに声をかけられた。このままだと、将来たいへんなことになるらしい。いったい、どうして？　ジェンダーバイアスと、どこかでつながりあった社会のしくみに気づいて考えはじめる男の子の物語。

出版社・・・偕成社

【絵本】
くろ
きくちちき　作

あいたいな、あいたいな。あいたい、あいたい―。犬の「くろ」が夜をとおして、猫の「しろ」に思いをつのらせ…。あいたいきもち、あえないきもち。やっとあえた時の、命がかがやく様子を描いたモノクロ絵本。

出版社…講談社

古河図書館

# わたしの夢

## 料理をつくり、人を笑顔にする人に

内田湊さん　古河第七小学校6年生

僕の夢は、料理をつくる人になることです。料理をつくる人になりたいと思ったわけは、家で僕が料理をつくった時に、家族が笑顔でおいしいと言って食べてくれたからです。僕は、料理をつくることが大好きですが、それ以上に、料理を食べた人の笑顔を見ることが大好きです。その笑顔を見ていると、とてもうれしい気持ちになります。母は、毎日、僕のお弁当をつくってくれています。これからも、母といろいろな料理をつくる練習をして、つくった料理で、人のことを笑顔にできる人になりたいです。僕は、笑顔が食べたいくらい大好きです。